

2026（R8）年度 文学部国文学科 学校推薦型選抜（一般）講評

出題意図

本文は、三田村雅子『記憶の中の源氏物語』（新潮社、2008年12月）の「1 男と女の源氏物語」の一節である。出題にあたっては、本学文学部国文学科のアドミッション・ポリシーに基づき、以下の3点を評価の柱として出題した。

- ・ 古典から近現代までの通史的な読解力：時代を超えて文章を読み解く基礎的な知識と教養。
- ・ 言語リテラシーの応用力：思考・判断・表現の基盤となる、正確かつ論理的な日本語運用能力。
- ・ 知的好奇心の広がり：言語・文学・歴史・社会に対する幅広い関心と探究心。

問一（漢字の書き取り）

【採点のポイント】

出題箇所 of 文脈に即した読みと、正確な字形を評価した。字形の多様性（許容体）については柔軟に認めたが、画数の誤りや別字と判断されるものは不可とした。

【講評】

全体として正答率は高かったものの、アの「耽読（たんどく）」において差がついた。「ちんどく」という誤答が目立ったが、「耽」は「耽美」「耽溺」などの熟語や「耽（ふけ）る」という訓読みでも用いられる漢字である。文脈における「没頭する」という意味を捉え、正確に想起できる語彙力が求められる。

問二（読解・説明問題）

【出題の趣旨】

傍線部①「とうていできない大事業」について、その理由を具体的に説明する問題。「物理的な困難さ」と「外的要因」の双方を指摘できているかが鍵となる。

【採点のポイント】

以下の3要素を基準に採点した。

1. 物量・労力：五十四帖にも及ぶ紙・筆の準備や、書写にかかる多大な労力・時間に触れているか。
2. 外的条件：長期間貸し出してくれる「寛大な持ち主（提供者）」の存在が不可欠である点に触れているか。
3. 結論：上記の理由により、物語を「所有する」こと自体が極めて困難であると結論づけているか。

【講評】

差がつく問題だった。多くの答案が「紙や筆の量」「書く大変さ」といった物理的側面に触れていたが、「原本を貸してくれる人の存在」という他律的な要因を落としているケースが散見された。単に「大変だった」で終わらせず、当時の時代背景を踏まえ、「自分一人の努力では完遂できない」という構造的な困難さを読み取れたかが評価の分かれ目となった。

問三（読解・要約問題）

【出題の趣旨】

傍線部②「源氏物語を『写す』という行為」について、筆者の独自の見解をまとめる問題。「写す」ことを単なる複製作業ではなく、創造的な営みとして捉え直せるかを問うた。

【採点のポイント】

筆者の主張に基づき、以下の3点を制限字数内にまとめているかを評価した。

1. 同化：筆致やリズムをなぞることで、作者と身体的・精神的に同化すること。
2. 主体性：自分好みの改変をも辞さず、「私だけの本」を作り上げること。※ここが筆者の主張の核心です。
3. 定義：「写す」ことは、作者として物語を「書く（生きる）」ことに等しい営みであるという結論。

【講評】

段落構成を理解していれば解答の方向性は掴みやすい問題だったが、精度の面で差が出た。「抑揚とリズムをそのままに反復」など本文の表現を引用する姿勢は見られたが、引用が長すぎて肝心の「私だけの本（改変・創造性）」という要素が欠落している答案があった。要約においては、本文の言葉をただ抜き出すのではなく、筆者の論理展開（同化→改変→創造）を整理し、自分の言葉で再構成する力が求められる。

問四（文法）

【採点のポイント・講評】

基礎的な古典文法の定着度を測ったが、以下のような誤答が見られた。文法は正確な読解の要である。

- ・「人もまじらず」の「ず」：「終止形」とする誤りがあった。
- ・「何にかはせむ」の「む」：「終止形」とする誤りが見られた。
- ・「事なければ」の「なけれ」：助動詞「けれ」と混同している答案があった。

問五（小論文）

【出題の趣旨】

本文における「物語を写す（＝物語を生きる）」という行為を、現代的な視点で抽象化し、論じる力を問うた。単なる物理的な書写の話にとどまらず、対象への能動的な没入や自己形成の営みとして解釈できているかが評価の出発点。

【採点のポイント】

評価は主に以下の3つの観点で行った。

1. 概念の定義（理解力）：本文の「物語を生きる」を、単なる読書や複製ではなく、「没入」や「能動的な関与」として抽象化できているか。
2. 具体例と主張の結合（思考力）：挙げた具体例（作品体験や創作活動など）が、自身の主張する「物語を生きる」ことの根拠として論理的に機能しているか。

3. 構成・表現（表現力）：明快な論理構成と、読み手を意識した適切な日本語表現ができていますか。

【講評】

意欲的な答案が多く見られたが、評価が分かれたのは「具体例の運用」だった。

評価した答案：

具体的な作品名を挙げ、その作品への没入体験がいかに関心につながったか、あるいは二次創作などの活動がいかに関心と原作との深い対話（生き直し）であるかを分析できていたものは高く評価した。現代において「写本」は一般的ではないが、それを「ゲームへの没入」「二次創作」「推し活」など、現代的な「能動的関与」に読み替えて論じ、応用力を感じさせる答案もあった。

課題が残った答案：

現実逃避との混同：本文では物語への没入を「大人になるための力を蓄える期間」として肯定しているが、単に「辛い現実から逃げる場所」として論じているものは、読み込みが浅いと判断した。

具体例の欠如・不一致：具体的な作品名を挙げず抽象論に終始したものや、例を挙げてもその分析がなく、主張と噛み合っていないために説得力に欠けるものがあった。

形式面：誤字脱字や、読み手を意識していない雑な筆跡も散見された。論述問題において、丁寧に文字を綴ることは、相手に考えを伝える第一歩であることを忘れないでほしい。

以上